退職にあたって

「アブラカダブラ」だか、「アブラブ」だか、何だかわからないのだが、近頃奈良文化財研究所にはどうやらこんな名の仲間が生まれたらしい。言割っておくが他人に迷惑をかけることのないいたって善良な同好の仲間らしい。どうも「明かり」をテーマにしていて、考古・文献・庭園・分析科学といった異分野の研究者からなり、日本列島ばかりか韓国や中国にも同志がいて、きわめて学際的かつ国際的である。いかにも奈文研らしい研究の芽である。私の知るところ、奈文研にはこのような芽がいくつも育っている。そしてこの明かりの芽には石灯籠の職人さんにも仲間の輪が広がっている。何時の日かこの小さな灯芯に、明るく暖かい火が灯ってほしいものだ。

平成24年は奈文研創設60周年の年にあたり、これを記念した企画に「奈文研親子教室」があったのをご記憶の方も多いだろう。これは夏休みの企画で、奈文研探険ツアー（平城編、藤原編）と染色体験とがあった。本番当日は、真夏の太陽が容赦なく照りつける暑い日だったことを今もよくおぼえている。

それから秋が来て11月初旬に、小さな僕とお母さんが奈文研に私を訪ねてきてくれた。少年の態度から訪ねようとしたのは、少年の方であることがすぐにわかった。そして彼は、そう勇気を振り絞って「お楽しみ会に来てください」と一息に大きな声で言ってくれた。お母さんが、少年と奈文研探険ツアーに参加したこと、お楽しみ会は幼稚園の企画であることを話してくれた。たしか復原なった大極殿を探険している時に、「僕の幼稚園がここから見える」と教えてくれた男の子がいた。今春に小学校に上がるその少年が、今も夏の企画を忘れないでいてくれたことを知ったその刹那、皆の努力でなった夏の奈文研企画は大成功であったことを知った。

染色に使った藍には、その後秋になって花壇で白い上品な花が咲き、初冬に結実した。その種子についてホームページのほかに新聞に掲載され、北は青森から南は福岡まで、種子希望の電話がきてお送りした。きっと今年の春には日本の各地で家族で藍の種子を撒き、可愛い芽が出て、梅雨時の雨を吸って大きく育ち、間違いなく真夏の青空色が染まるだろう。藍は、強くて、そして美しいのだ。

（副所長　深澤 芳樹）